

周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ

昭和61年3月

赤穂市教育委員会
赤穂埋蔵文化財調査会

正 誤 表 周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ

ページ	行	誤	正
1	1 5	20mピッチで	20mピッチの
1	1 5	道路幅を	長さ道路幅とする
1	2 1	発掘した	発掘調査した
5	1 2	小川岸段丘上に	小河岸段丘上に

序

今回、周世土地改良区が周世入相遺跡地内に農業基盤整備工事をすすめるにあたって、赤穂市教育委員会は、兵庫県教育委員会の指導を得て、確認調査を実施いたしました。

本書は、この確認調査の概要をまとめたものであり、多くの方々に、周世入相遺跡の一端を知っていただき、今後このような遺跡の保存と活用にいささかでも寄与できれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたって、ご指導・ご協力いただいた兵庫県教育委員会、周世土地改良区、赤穂埋蔵文化財調査会をはじめ、関係各位に心から厚くお礼申しあげる次第であります。

昭和61年3月31日

赤穂市教育委員会

教育長 木 山 正 規

例 言

1. 本書は、赤穂市周世地域において周世土地改良区の土地改良総合整備事業に先立ち実施した周世入相遺跡における遺跡確認調査の概要報告である。
2. 発掘調査および報告書作製に要した諸費用は、周世土地改良区の負担による。
3. 調査は、兵庫県教育委員会の指導のもとで、周世土地改良区から調査委託を受けた赤穂市教育委員会が主体となり、現地調査を赤穂埋蔵文化財調査会と合同で実施した。

調査担当者および報告書作製者

河原 隆彦（東洋大学附属姫路高等学校教諭）

宮崎 素一（赤穂市教育委員会）

石塚 太喜三（姫路市立朝日中学校教諭）

竹本 敬市（上郡町立上郡中学校教諭）

岡本 欣子（奈良大学文学部OB）

小林 基子（ノートルダム清心女子大学学生）

阿賀 恵理（兵庫県立姫路短期大学学生）

河部 元一（赤穂海水化学工業株式会社勤務）

4. 調査期間は、昭和60年5月1日から昭和60年5月9日まで実施し、整理は昭和61年2月1日から昭和61年2月27日まで赤穂市民俗資料館にて行った。
5. 遺構および遺物の写真撮影は、河原、宮崎、河部、遺構の実測は、石塚、竹本、小林、阿賀、図のトレースは岡本が行った。
6. 本書の執筆は、宮崎、岡本が共同で行い、編集は宮崎が行った。
7. 本書に関係する実測図、写真、遺物等は、赤穂市教育委員会で管理し、赤穂市民俗資料館に保管している。
8. 本書で使用した標高値は海拔値で、方位は磁北を示す。
9. 調査および本書作成に際し、多くの方々から指導・助言および協力を頂いた。御芳名を記して謝意を表します。

西口和彦、古林森重、高田徳幸、兵庫県教育委員会、周世土地改良区、赤穂市農林水産課

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	3
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の概要	5
1. 遺構	5
2. 遺物	6
IV まとめ	10

図面目次

図 1 グリッド土層図	11
図 2 1-Dグリッド平面図	12
図 3 101-Cグリッド平面図	13
図 4 103-Bグリッド平面図	14

図版目次

図版 1 遺跡 (1) 遺跡遠景 (2) 3グリッド南壁面土層	15
図版 2 遺跡 (1) 1-Dグリッド (2) 1-Dグリッド杭列出土状況	16
図版 3 遺跡 (1) 103-Bグリッド (2) 103-Bグリッド石組出土状況	17
図版 4 出土遺物 (1) 須恵器 (2) 土師質土器	18
図版 5 出土遺物 (1) 瓦質土器 (2) 近世土器(備前・丹波)	19
図版 6 出土遺物 (1) 近世土器(染付磁器) (2) 近世土器(施釉陶器)	20

挿図目次

第1図 グリッド設定図	2
第2図 遺跡周辺地形図	4

表目次

第1表 出土土器グリッド別一覧表	8
------------------	---

I はじめに

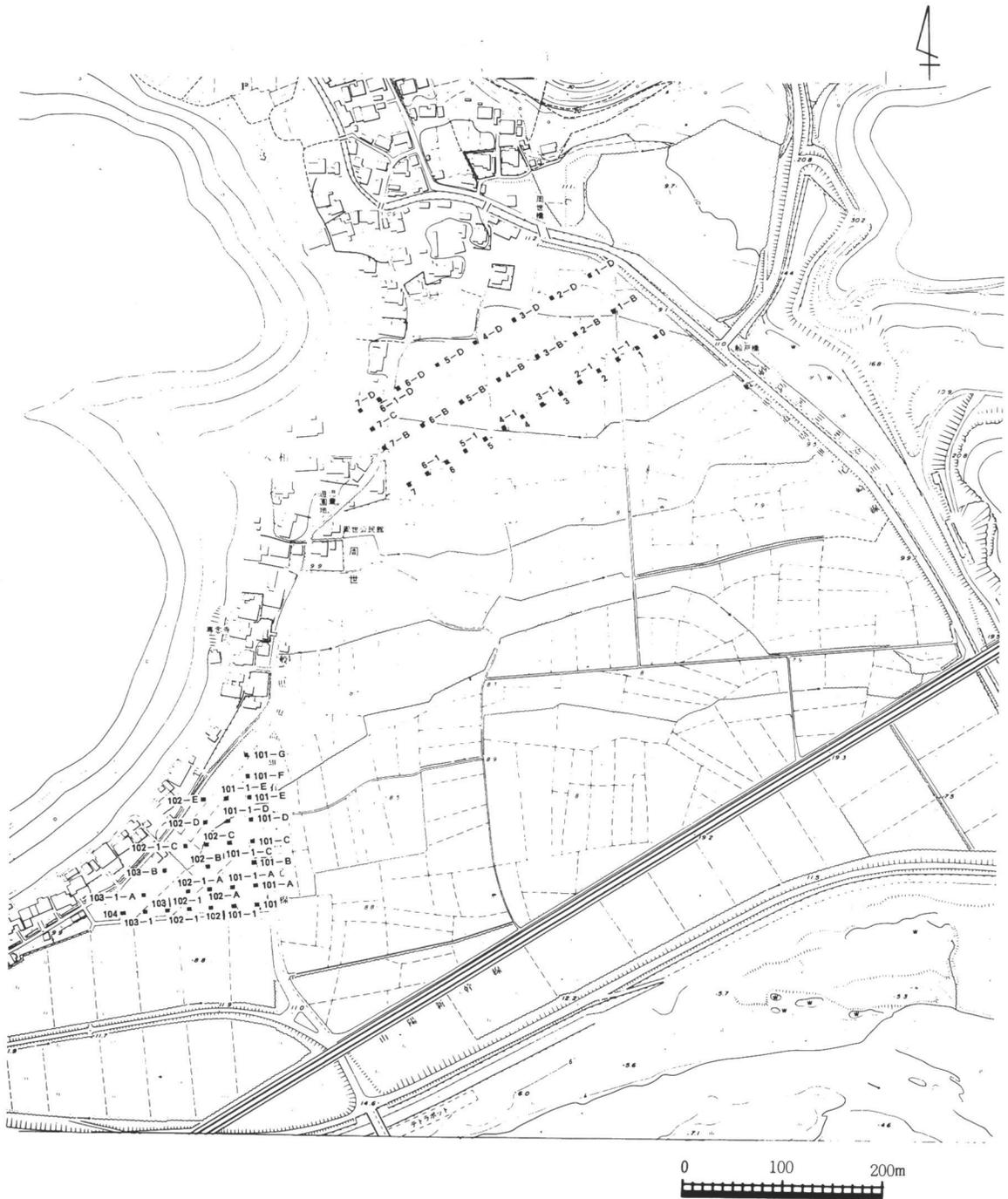
1. 調査に至る経緯

周世地区も、他市町と同様に、近年推進されている農業基盤整備事業という土地改良開発を受けることとなり、昭和56年初頭には赤穂市農林水産課よりその整備事業計画が示された。その事業は、昭和58年度から昭和63年度までの6ヵ年事業とし、面積にして34ha実施したい旨の連絡を赤穂市教育委員会へもたらされた。この計画地は、遺跡台張に登載された周知遺跡である周世入相遺跡があり、教育委員会としては、この事業に先立つ分布調査を昭和57・58年度の2ヵ年にわたって実施した。

分布調査では、計画地のほぼ全域にわたって土器片の散布がみられ、特に弥生土器片、須恵器片を多量に採集した。これら分布調査・ボーリング調査の結果、農業基盤整備事業の実施に先立つ確認調査が必要であるという結論に至ったわけである。

また、昭和58年10月頃には、農業基盤整備事業の主幹道路が県道高雄～有年横尾線のバイパス建設（道路幅10m、全長480m）の代替としての計画案が示され、昭和59年1月初旬にその建設予定地内の事前確認調査を実施した。その確認調査は、道路総延長をほぼ20mピッチでトレンチ発掘調査をし、道路幅をトレンチ19本を設定のうえ発掘調査をした。その結果、土器群の遺構面をはじめとする包含層が検出され、全長480mのうち南側より160mについては、全面発掘が必要となったわけである。

次いで、今回の調査は、昭和60年度農業基盤整備事業に先立つ遺跡確認調査であり、事業計画は2.9haであるが、従来より知られている散布地でもあり、40m四方に3m四方の坪掘（グリッド）を実施し、また工事によって確実に消失する排水路部分は、20m間隔でもって発掘した。



第1図 グリッド設定図

2. 調査の組織

今回の調査は、昭和60年度農業基盤整備事業に先立ち実施したものであり、原因者は周世土地改良区、工事担当課は赤穂市農林水産課である。遺跡確認調査の事業主体は、赤穂市教育委員会にある。赤穂市教育委員会は、赤穂埋蔵文化財調査会に調査委託し、兵庫県教育委員会、赤穂市教育委員会の指導のもとで、調査を実施した。

その体制は、次のとおりである。

団 長 松岡 秀夫（財団法人 有年考古館長）

調 査 員 河原 隆彦、宮崎 素一

調査補助員 石塚 太喜三、竹本 敬市、岡本 欣子

調査参加者 山本 勝己、中川 春夫、橋本 新二郎、浮田 邦夫、神吉 安正、
溝田 寛人、源 英夫、小林 茂昭、高瀬 敏夫、古林 一成、木村
強、小林 基子、阿賀 恵理、久須 博、高畑 善雄、岡野 明正、
藤井 徳光、中谷 清、山本 辰造、前川 仁、丸山 渡、川田 正
義、射延 勝男、河部 元一、松本 保、大道 勝次、高瀬 泉、大
谷 重夫、前田 正義

調査事務局 赤穂市教育委員会 社会教育課

調 査 指 導 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

Ⅱ 遺跡の位置と環境

周世入相遺跡は、現在の海岸線より内陸部へ千種川を遡ること約7.5kmに位置し、西方は神護寺がある高雄山に、東に荒山山系の支脈が南方へ延びた周世奥山によって囲まれ、南は千種川によって区切られた地域である。

かつては、狭くて深い谷野であっただろうが、周辺の山々から流れ出る土砂と南下する千種川が、立巖の狭い間げきを抜けて東へ流れ、この周世の谷間は水裏となり洪水のたびに土砂堆積が進み、次第にこの谷を埋めて広がっていったものと考えられる。

周世入相遺跡周辺で知られる弥生時代の遺跡としては、上流地の有年では、与井谷口遺跡、野田遺跡、上所二又溝遺跡、上所山田遺跡、精谷山遺跡、三軒家遺跡、北原遺跡、奥山遺跡、木虎谷遺跡、北畠北山遺跡、ハトカ茶畑遺跡、山田遺跡、下菅生遺跡、沖田



1. 高野須城
2. 轡ヶ堂城
3. 駿行寺
4. 沖田遺跡
5. 鍋子城
6. 下菅生遺跡
7. 宮裏山群集墳
8. 黒谷古墳
9. 船戸山群集墳
10. 水木原古墳
11. 神護寺
12. 入相遺跡
13. 坊主屋敷
14. 門前遺跡
15. 門前群集墳
16. 八重山古墳
17. 尼子山城
18. 上高野 (銅鐸石製
鑄型出土地)
19. 高取山積石塚古墳群
20. 高取山群集墳
21. 高伏山古墳群
22. 岩屋寺廃寺
23. 堂山遺跡
24. 大林古墳群
25. 築田遺跡
26. 妙見寺
27. 茶臼山城
28. 坂越浦城
29. 生島古墳
30. 経塚遺跡
31. 南野中中州遺跡
32. 南野中川岸遺跡
33. 赤穂大橋下遺跡
34. 赤穂城跡
35. 猪壺谷遺跡
36. 大塚古墳

第2図 遺跡周辺地形図(5万分の1)

遺跡と数多く、下流地では、約2 km下がった所の上高野において、昭和51年に銅鐸石製鎔范が発見され、さらに約2 km下がった千種川床の南野中中洲遺跡、南野中中川岸遺跡、赤穂大橋下遺跡が存在する。また、海岸線においては、小島遺跡、猪壺谷遺跡、塩屋堂山遺跡が確認されている。

次いで、古墳時代に入ると、北の高雄山東山裾に存在する水木原古墳（1基）、北方の黒谷にある周世宮裏山古墳（27基）、周世黒谷古墳（1基）、東方の船戸山には、昭和61年1月に発見された船戸山古墳（5基）が、囲りの三方の山々に存在する。

この周世入相遺跡と考えられているところの沖積地の西方山裾近くは、宮田、北鎌倉という小字があり、この辺りよりやや小高い入相、宮田と呼ばれる水田地が広がり、一種の微高地を形成している。この遺跡の現在の地形をみると、南部は約50～60km下がった旧千種川床が存在し、東方においても旧水木原川による低湿地をみることができ、いわゆる小川岸段丘上に築かれたものと解する。

この遺跡は、戦後互製造用粘土を採取している時に、地元の松本保氏によって、多数の土器片、石器類が採集され、その存在が確認された。その遺物類は、資料として『周世入相遺跡発掘調査報告書』（昭和59年、赤穂市教育委員会刊）で一部公開され、周世入相遺跡の概要についても、『赤穂市史』、前述の『調査報告書』に既に詳しく報告されているので、それを参照されたく今回は省略する。

Ⅲ 調査の概要

調査は、農業基盤整備事業地内の遺物包含層、遺構の存在の確認に主眼をおき、土器の散布状況および現在の地形を考慮し、原則として排水路計画地は20mピッチ、その他は、20m四方、40m四方にそれぞれ1グリッドを設定した。グリッド数は、県道高雄～有年横尾線バイパス建設予定地をはさんで、東方に30カ所、西方に27カ所、総数57カ所の坪掘を実施した。

以下、検出できた遺構、遺物の概要を述べる。

1. 遺 構

1-Dグリッド

現表約1 m下の灰青色粘質土層より杭列を検出した。2列状を呈し、それぞれ幅約45

cm、50cmを計る。遺物としては、須恵器片の小片を数点出土したが、年代を確定できるものはなかった。その杭列の性格を断定できるものはなく、不明である。

101-Cグリッド

現表下60cm黄褐色土層から径50cmの柱穴かあるいはピット遺構を検出したが、内より出土遺物もなく、年代および性格を明らかにできなかった。

103-Bグリッド

現表下50cm、第6層灰茶色土層において、山石の割石から成る石組遺構を3群検出した。それぞれ現長1m×3m、1m×1m、30cm×50cmを計るが、年代・性格を明らかにすることができなかった。伴出遺物からおそらく近世の暗渠遺構であろうと思われる。

2. 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物には、弥生土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器類がある。図化しうる遺物は皆無に等しく、器形を判断することも困難な細片が殆どであった。

弥生土器

今回、出土した遺物のうち、弥生土器の占める割合は極めて少なく、細片2個のみである。

須恵器

須恵器は、今回出土した遺物の約半数を占めており、大別して4時期にわけられる。しかし、図化しうる遺物は皆無である。

I 時期 古墳時代。6世紀後半のものと思われ、陶邑編年のいうところのII型式第2段階の須恵器で、蓋坏、甕がみられる。蓋は天井部のみで、内面に円弧叩きがスタンプされている。坏身は底部のみで、回転ヘラ削り調整を施している。甕は頸部のみで、比較的短く、端部から外方へ大きく屈曲させている。体部外面は、平行叩きの上を回転を利用したカキ目調整が施され、内面には円弧叩きを施している。

II 時期 平安時代中期。10世紀のものと思われ、蓋、坏がみられる。蓋は天井部の

みで、ヘラ切りの痕を残し、いったん丸く屈曲して続いている。坏は底部のみ2個体出土しており、いずれも糸切りを施している。体部と底部の境がやや段状になっているものと、平底で輪高台を貼り付けているものがある。

Ⅲ時期 平安時代後半～鎌倉時代初め。11世紀から13世紀にかけてのものと思われ、小皿、甕、碗がみられる。小皿の口縁部は、黒灰色を呈し、端部は丸くおさめている。体部は内彎気味に立ち上がり、底部は糸切り平底である。甕は胴部のみで、外面には平行条線の叩き目を施しており、内面は横位のナデ仕上げによって調整されている。碗は口縁部、底部の2個体をみることができ、口縁部は、内彎ぎみにのびた後、端部で外方へ屈出しており、端部は丸い。底部は回転糸切りのベタ高台で、周線は未調整のままである。

Ⅳ時期 鎌倉時代。13世紀から14世紀前半にかけてのものと思われ、鉢、甕がみられる。鉢の体部外面には、平行条線の叩き目が施されている。底部は、回転糸切りの後、ヘラ削り、ナデ調整を施し、完全な平底ではなく、高台気味に突出させている。甕は胴部のみで、外面に平行条線の叩きが施され、叩き目は細かい。

土師質土器

土師質土器は、量的にはかなりみられたが小片であり、器種など判断できないものが殆どであった。これらを大別すると2時期にわけられる。Ⅰ時期は、平安時代末頃、12世紀末頃のものと思われ、Ⅱ時期は江戸時代中頃、18世紀から18世紀中頃のものと思われる。Ⅰ時期のものに小皿底部がみられる。底部は回転糸切りを施し、底部壁が体部壁と比べて著しく分厚い。底部脇に屈曲部をもち、外反気味に開いている。Ⅱ時期のものに羽釜、焙烙、土塀がみられる。羽釜は、鏝部のみで、短くやや外上方にのび、端部は丸い。体部は内彎気味に下内方に下っている。焙烙、土塀とも体部のみみられる。焙烙の体部外面は削り調整、内面はヘラナデの後、ヨコナデ調整を施している。土塀の体部外面は、叩き目を施した後、ヨコナデ調整、内面はヘラナデの後、ヨコナデ調整を施している。

瓦質土器

瓦質土器は、17世紀から18世紀にかけてのものと思われる破片が数個みられる。甕の体部のみで、内外面ともヘラ削りの後、ヨコナデ調整を施している。

グリッド名	層位	土 器				陶 器				磁 器		その他	備 考
		弥生	須恵器	土師器	瓦質	備前	丹波	唐津	京焼系	施釉	染付		
1 - D	4		○	○						○			木製品
2 - 1	3		○	○						○			
2 - D	3					○				○	○		平瓦
	4		○			○				○		○	
4 - B	3		○			○				○			
6 - 1	4								○				
7	4			○									
7 - B	3					○							
101 - A	4						○			○			
101 - D	4									○			
101 - E	3									○			
101 - F	4		○										
101-1-D	4									○			
102 - D	4			○						○			
102 - E	3		○							○			
102-1-D	7									○			
	8		○	○									
103 - B	3									○	○		
	6		○									○	
103 - C	3			○									
	4			○		○				○			平瓦
	5		○	○		○	○						平瓦
103-1-A	5		○	○						○			
103-1-B	3		○							○			
104	3		○			○	○			○	○		
	4			○						○	○		
	5		○	○						○	○		
	6	○	○		○								

表-1 出土土器グリッド別一覧表

近世土器

近世の遺物としては、備前・丹波・唐津・磁器、京焼系・施釉陶器がみられる。時期は18世紀中頃を中心としている。これらも細片が多く、図化しうる遺物は少ない。

(備 前)

播鉢、小壺、甕がみられる。播鉢は、口縁部のみ3個体みられる。口縁部が内傾し、外面に2条、内面に1条の沈線をもつものと、口縁部が直立し、外面に2条の沈線をもつものがあり、いずれも7条1単位の播し目が施されている。小壺は、底部のみみられ、ロクロ成形。底部はヘラ削りが施され、薄く塗り土している。また、胎土中に黒色鉱物粒を含んでいる。甕は口縁部のみみられ、頸部で「く」字形に屈曲した後、垂直に立ち上がる。口唇部は面をもち、外方へやや突出している。

(丹 波)

小皿、壺がみられる。小皿はロクロ成形で回転ナデ調整を施している。内面、口縁部外面に施釉している。壺は底部のみ2個体みられる。ロクロ成形で、内外面ともヨコナデ調整を施し、外面のみ施釉しているものと、内面に粘土紐痕が明瞭に残り、内外面とも施釉しているものがある。

(唐 津)

鉢がみられる。体部は直立し、腰部以下無釉である。内外面ともロクロナデの後ロクロ削り調整を施し、高台畳付釉のかき取りをしている。また、内外面に白土を刷毛目した文様が施され、器面に細かい貫入が走っている。

(磁 器)

白磁・青磁・染付磁器がみられる。白磁は、碗のみで高台はやや内にはいり、畳付は平ら。畳付、高台内は無釉である。体部は、丸味をおび外上方にのび、胴部には著しい貫入がみられる。青磁は、碗・皿がみられる。碗の体部は、ゆるやかに外上方にのび、口縁部は丸くおさまっている。皿の体部は、丸味をもって外上方にのびやや大きく開いている。口縁部はやや内反し、端部は丸くおさまっている。また口縁部は波状、体部は蓮弁状を呈し、淡青緑色釉を施している。染付磁器は、18世紀後半以降盛んに焼造された「くらわんか手」と呼ばれるもので、やや厚手で、青っぽい色調を呈し、呉須の発色の悪いもので、碗・皿がみられる。碗は、内外面ともに草花文、界線を施し、高台畳付釉がかき取られている。皿は、内面に草花文、界線を施し、内面の釉を輪状にかき取っている。また、高台畳付釉もかき取られている。

(京焼系)

ほぼ完形な蓋がみられる。口縁部は直立している。ロクロナデ調整で、つまみが貼付されている。外面には、呉須、鉄釉、界線、巴文、点文が施されている。

(施釉陶器)

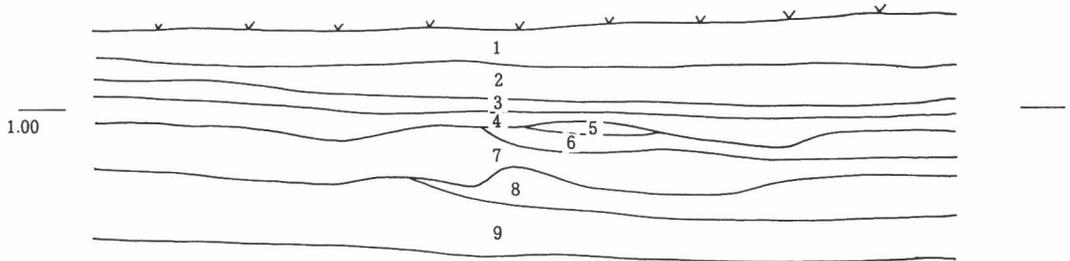
埴、急須、壺がみられる。埴の体部は内彎し、口縁部はやや上方へのび、折り返しを施している。内外面ともロクロナデ調整を施し、器面に貫入がみられる。急須は底部のみみられ、上げ底である。内面は無釉で内外面ともロクロナデの後、ロクロ削り調整を施している。壺の体部は内彎しており、内外面とも器面に細かい貫入が走っている。

IV ま と め

今回の調査において、出土した遺物は量的に少なかった。しかも小片で、年代決定も明らかにできないほどで、遺構の性格を判断するにも難しかった。しかも、水田耕土を削平すると、近年の暗渠が出てきて、殆どのグリッドはかなりの攪乱を受け包含層も大部分破壊されていた。

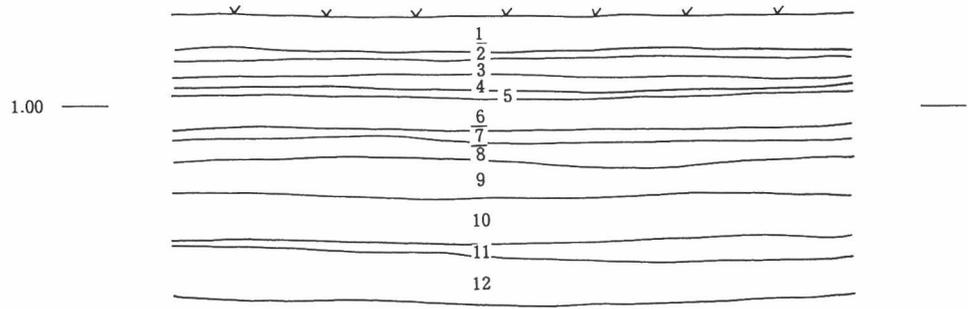
今回確認調査したグリッドの土層は、大概にして2分でき、県道高雄～有年横尾線東側のグリッドは、青灰色、灰褐色粘質土やシルト層、粘土層からなり、西側のグリッドは、黄褐色、茶褐色などの砂層、細砂層が殆どであった。いずれも旧千種川、旧水木原川の沖積地として構成されたものと判断できよう。

今回は、遺構面の検出は少なかったが、今後予定されるこれらの挟まれた地点は現地形をみてもわかるように、千種川と水木原川の合流地として微高地を形成しており、しかも水田地表下に土器片の散布密度が高く、それらから推察してみると、周世入相遺跡は、ここであろうと考えられるので、今後の調査を待つことにしたい。



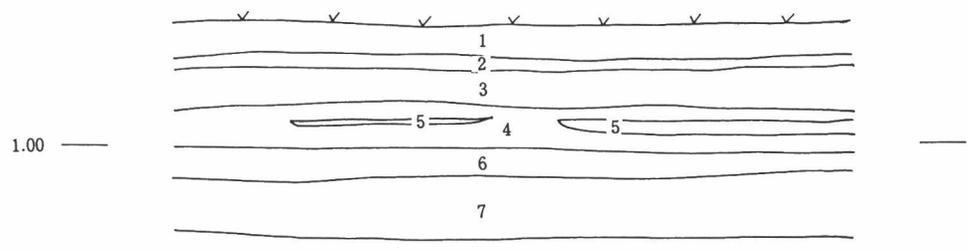
- | | |
|-------------|------------|
| 1. 耕作土 | 6. 茶褐色土層 |
| 2. 灰黄褐色粘質土層 | 7. 礫層 2 |
| 3. 暗茶褐色粘質土層 | 8. 灰青色粘質土層 |
| 4. 礫層 1 | 9. 灰茶色砂層 |
| 5. 黄色砂礫層 | |

1-Dグリッド西壁面



- | | |
|----------|------------|
| 1. 耕土 | 7. 灰黄色土層 |
| 2. 黄褐色土層 | 8. 灰白色土層 |
| 3. 灰白色土層 | 9. 黄褐色土層 |
| 4. 黄褐色砂層 | 10. 灰茶褐色土層 |
| 5. 灰白色砂層 | 11. 黄褐色砂層 |
| 6. 灰茶色土層 | 12. 茶色砂層 |

101-Cグリッド西壁面



- | | |
|----------|--------------|
| 1. 耕土 | 5. 灰白色砂混じり土層 |
| 2. 黄褐色土層 | 6. 灰茶色土層 |
| 3. 灰白色土層 | 7. 暗灰茶色砂層 |
| 4. 茶褐色土層 | |

103-Bグリッド西壁面



図 1 グリッド土層図

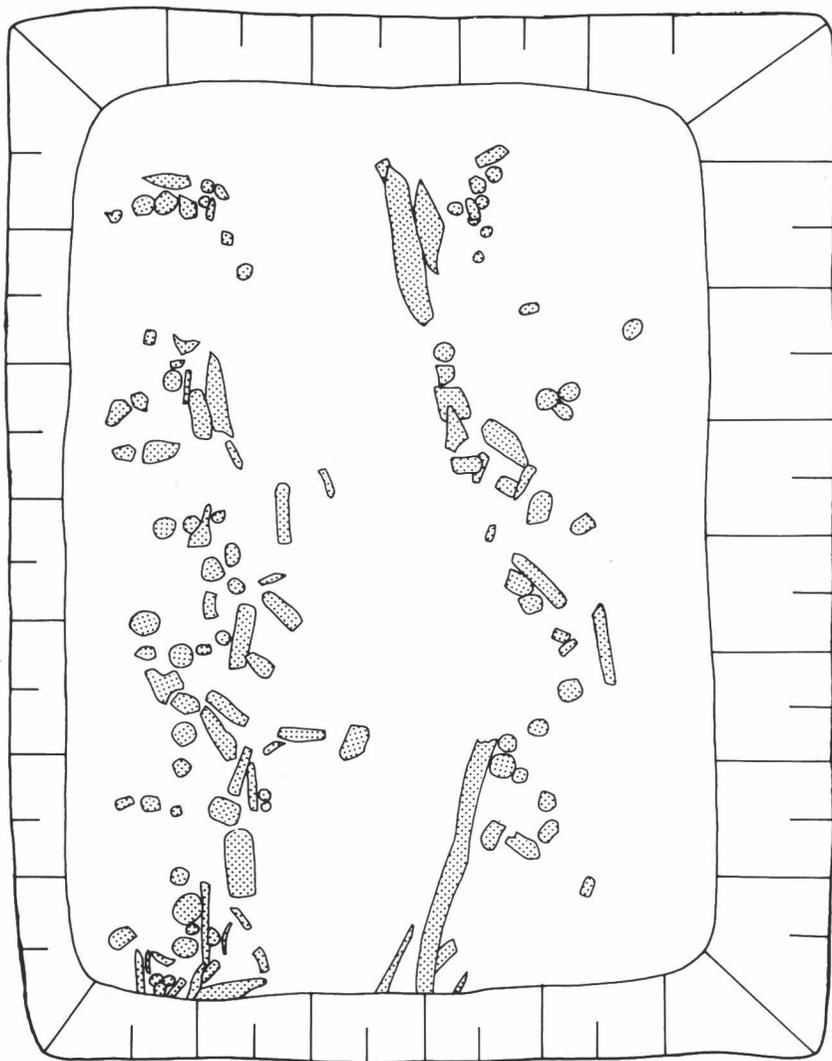


図 2 1-D グリッド平面図



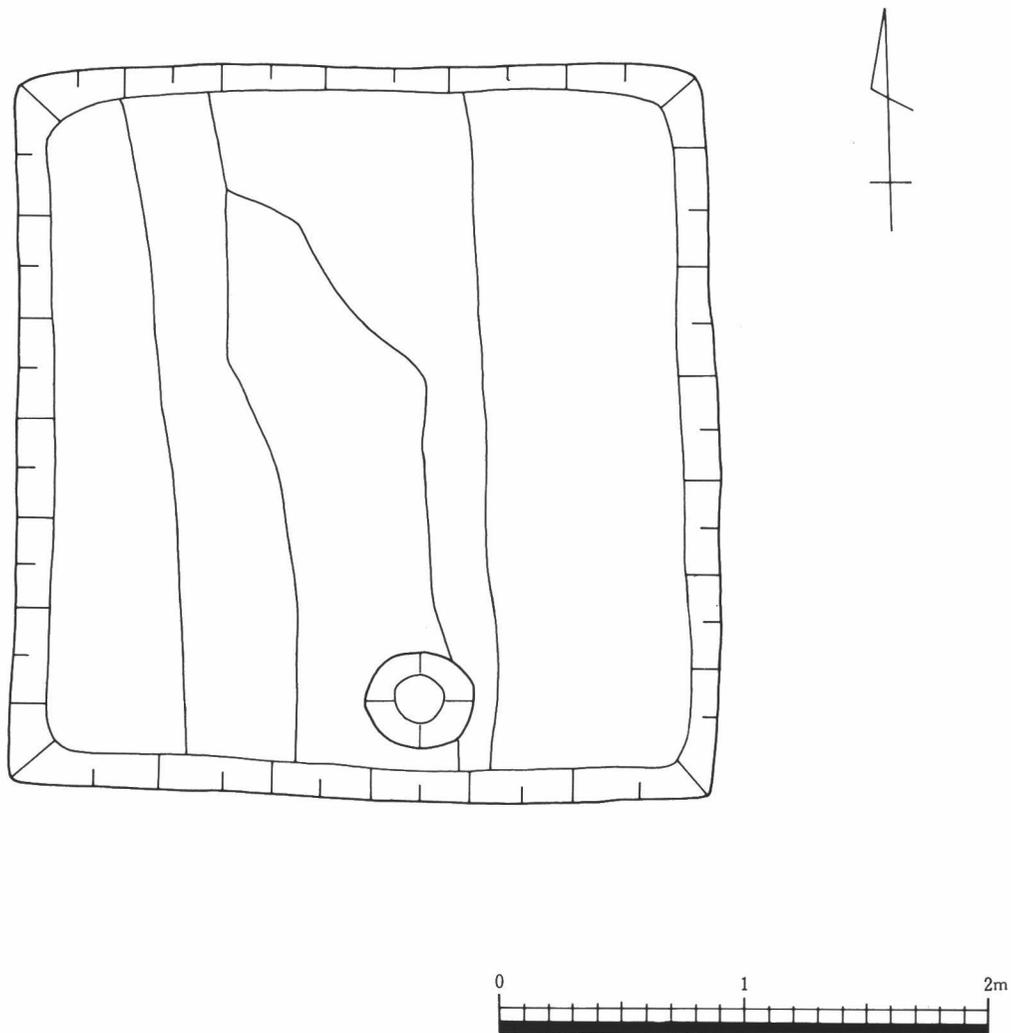


図 3 101-Cグリッド平面図

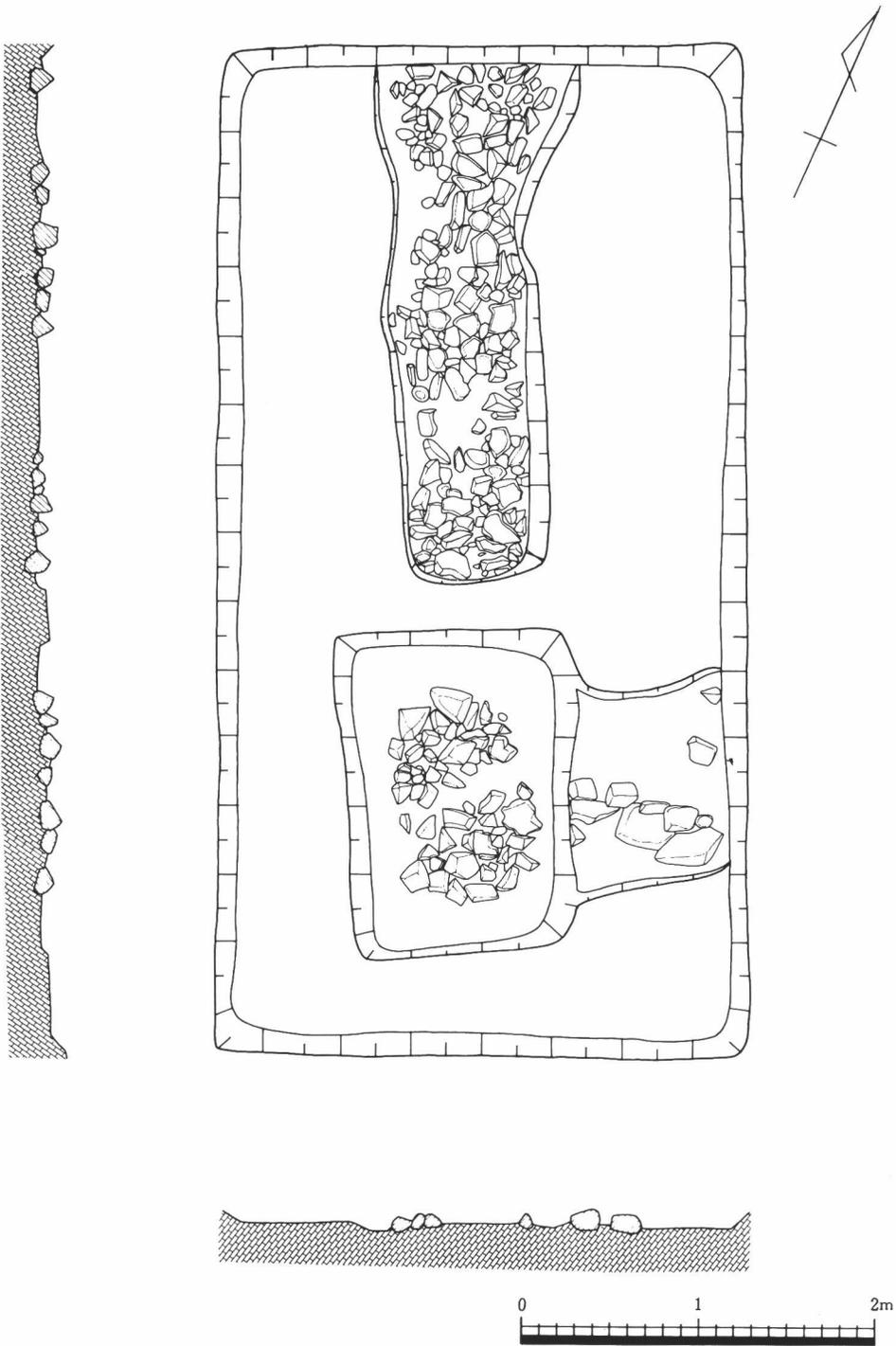
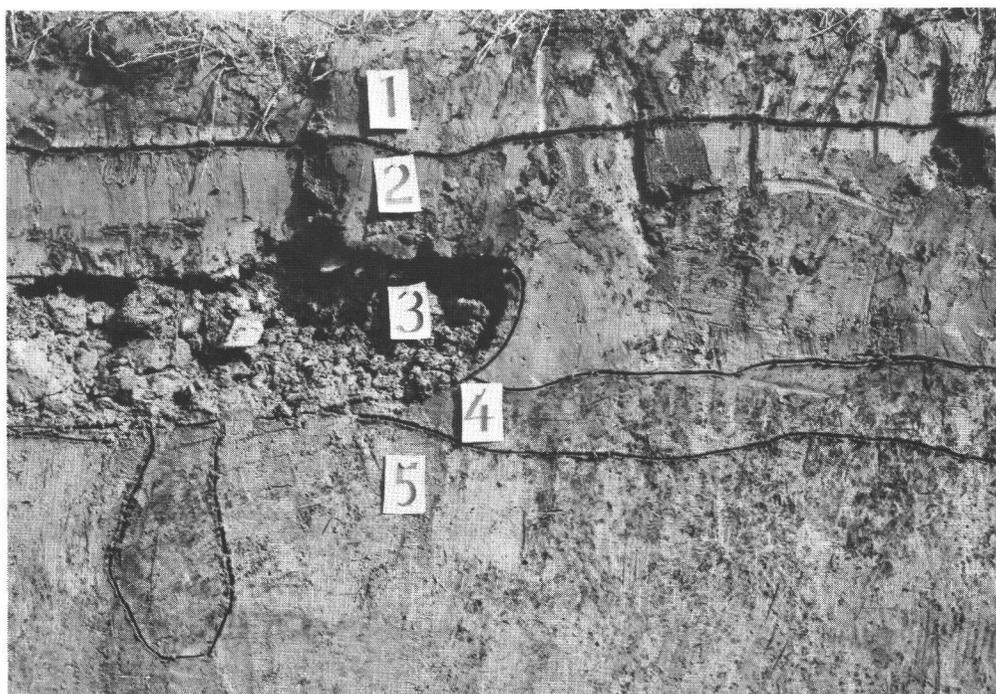


図 4 103-B グリッド平面図



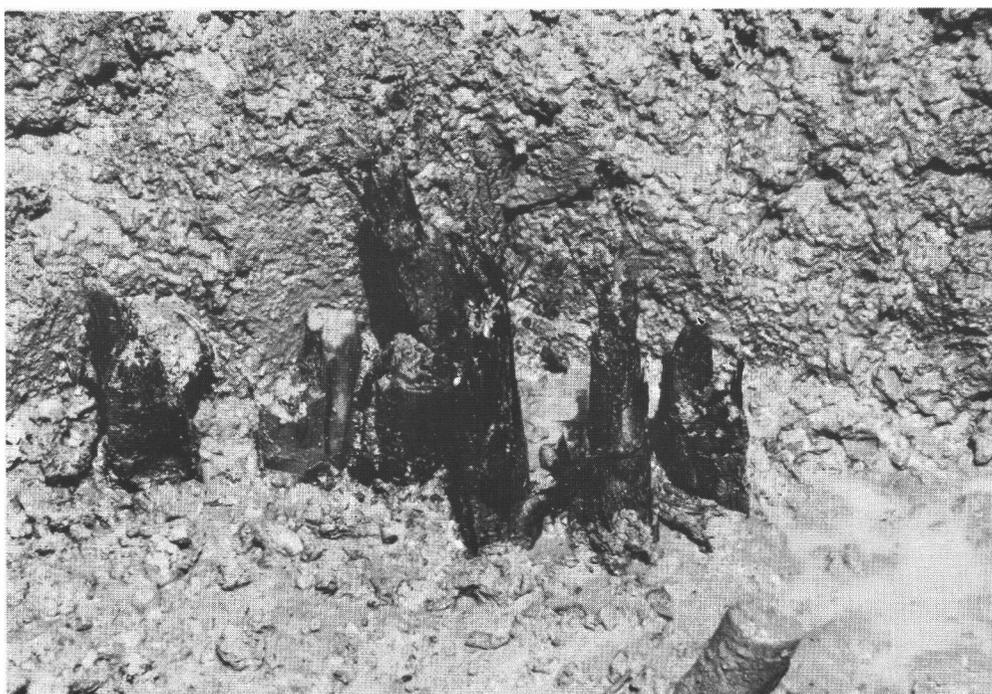
(1) 遺跡遠景



(2) 3グリッド南壁面土層



(1) 1-Dグリッド



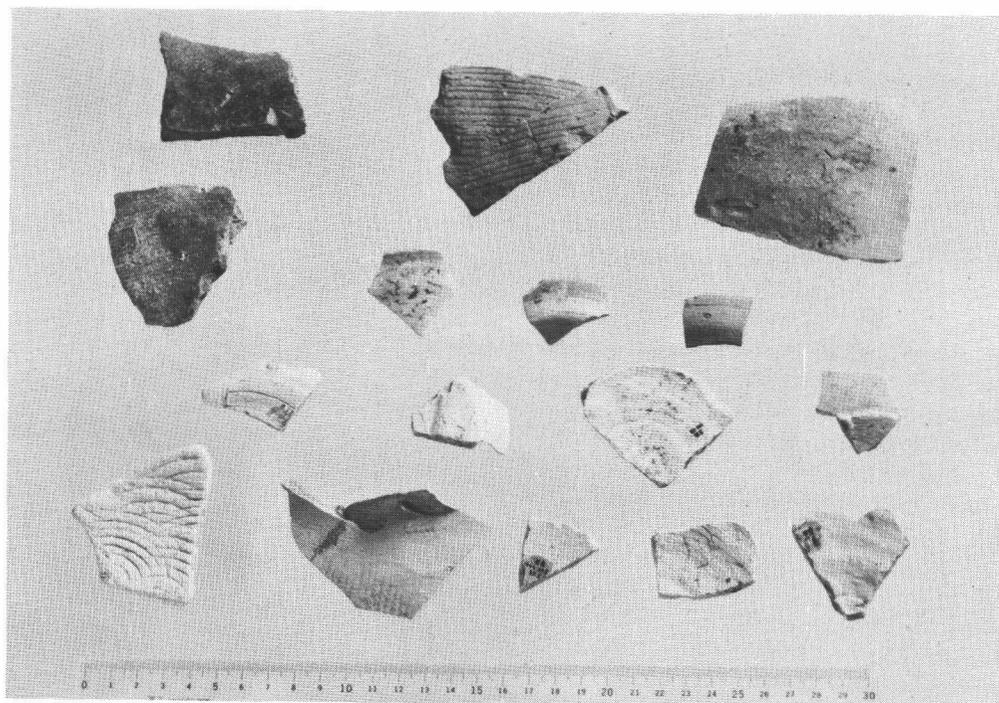
(2) 1-Dグリッド杭列出土状況



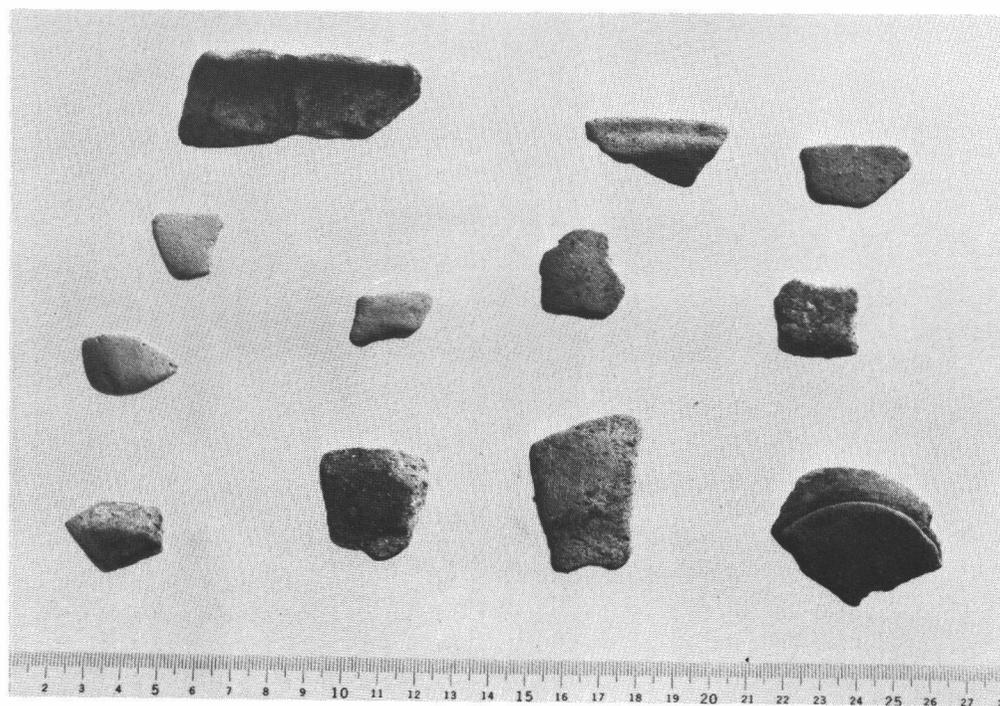
(1) 103-Bグリッド



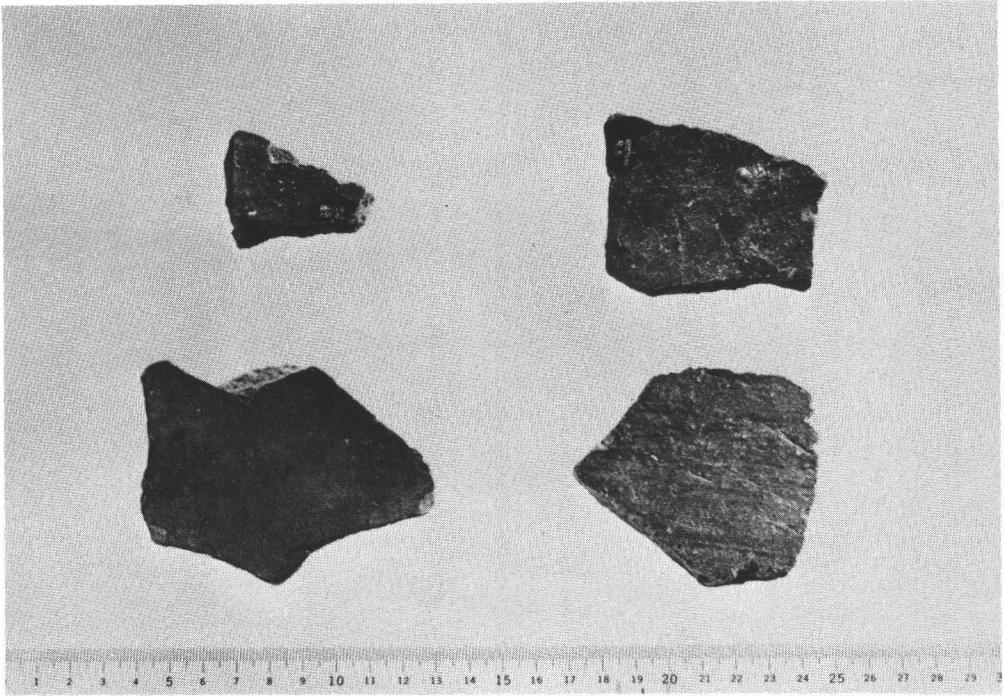
(2) 103-Bグリッド石組出土状況



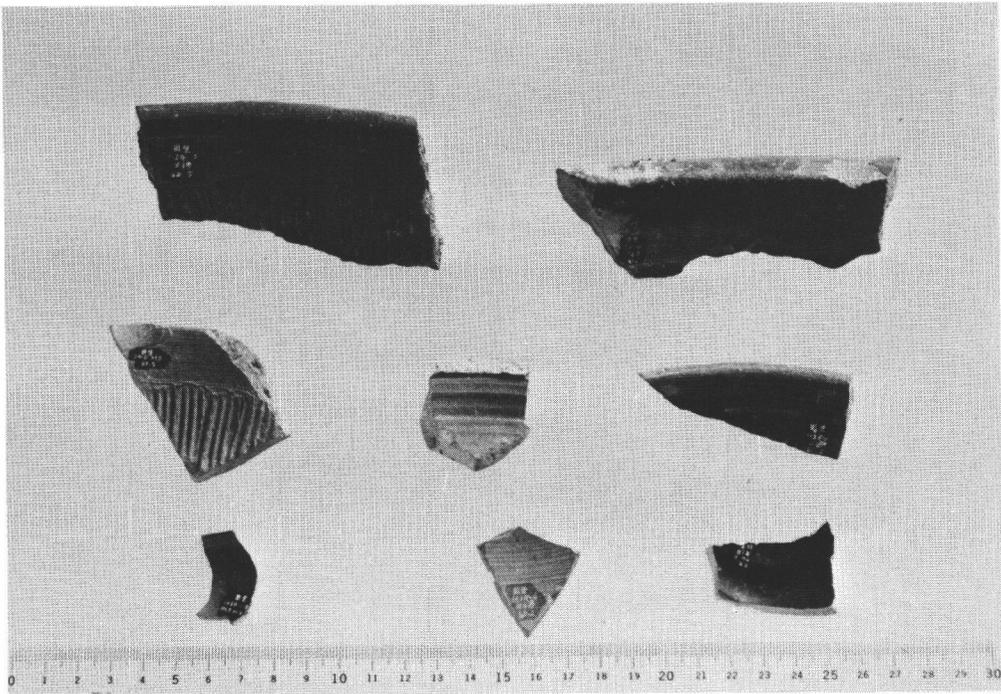
(1) 須恵器



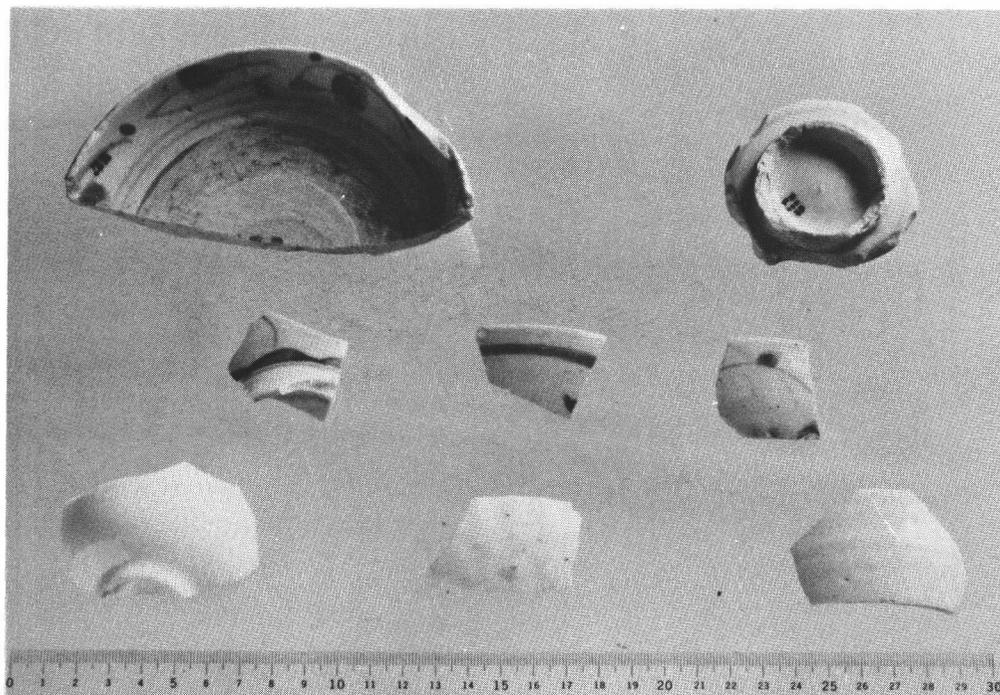
(2) 土師質土器



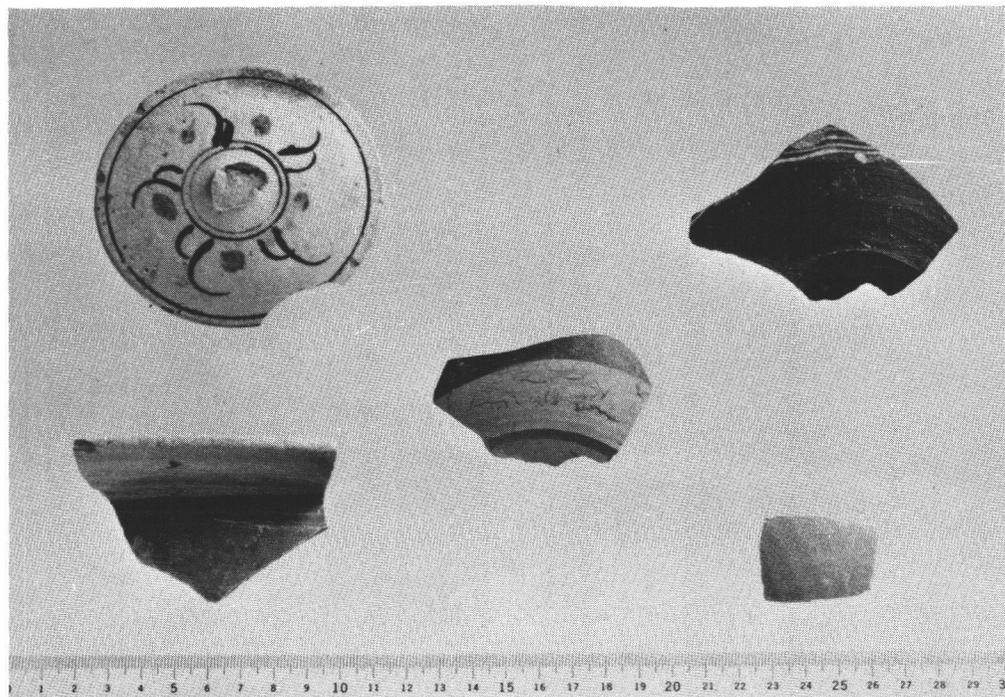
(1) 瓦質土器



(2) 近世土器 (備前・丹波)



(1) 近世土器 (染付磁器)



(2) 近世土器 (施釉陶器)

赤穂市文化財調査報告書 19

周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ

昭和61年3月31日

編集 赤穂埋蔵文化財調査会

発行 赤穂市教育委員会

〒678-02 赤穂市加里屋81番地

印刷 東洋紙業合資会社

本データは全国遺跡報告総覧において公開するため、
赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係が編集・作成したものです。

データ編集・作成 赤穂市教育委員会 生涯学習課 文化財係
〒678-0292 兵庫県赤穂市加里屋 81 番地
TEL：0791-43-6962 FAX：0791-43-6895

令和元年（2019年）10月1日 データ編集・作成